只見短歌会　三月詠草

大塚栄一　指導

桐の木は駱駝色せる花の芽を高く掲げて冬を越しをり　小倉キミ子

雨風の中出づる兄が風温くなりしを言ひて暇乞ひなす　五十嵐夏美

夕餉あと卒業証書の貰ひ方習ふ女孫をわれも見守る　古川　英子

集落の空寺なれど涅槃会の伝統守り祭事引き継ぐ　渡部ゆき子

伊勢参りいつか行かむと心して果たせし年に深く感謝す　関谷登美子

長生きはするものと言ひわが料理同居の老いら喜びて食む　新国由紀子

トタン屋根に音たてて降る雨寒く目覚めて春も近しと思ふ　馬場　八智

月移り行事書きおくカレンダー夫が切りしを拾ひ皺伸ばす　目黒　富子

暖かき日々の続けば草や木の芽吹くも突然の雪に覆はる　渡部ヨリ子

膝痛み再び手術を受けるとふ姉の気落ちをわが子労はる　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　四月例会

目黒十一　指導

暖かや土曜の午後の美容院　敦子

木の根明くまだ雪閉ざす山の家　信

夕空に風たちはじむ杉の花　又壱歩

語り継ぐ震災のこと水温む　邦男

春の川片足安め鷺の立つ　吉児

カラフルな冬の帽子や通学路　恒夫

冴返る朝の時報の音遠き　修一

室に咲く花の純白山笑う　邦夫

渾身の踏ん張る力仔馬立つ　順子

残る雪グサと突き抜く水芭蕉　都

冬構解くやまんまる昼の月　洋子

般若会の風はかすかや雪解音　一穂

残雪やいつか歩幅を大きくし　礼

作付けの思案いそがす雪間かな　リウコ

残雪の飯豊山を拝みけり　十一

シクラメン兄弟多き頃をふと

地震の地に春の足音そっと寄る

黙祷の合掌長し春の雪

麗らかや江の島に見る雪の富士

峠路や枝木の跳ねる残る雪

春嵐誰も来ぬ日の戸のきしみ

春の夜の闇を揺らして地震来たる

黙祷のサイレンの音小雪舞う

蛇行して幅広げ行く春の川

雪雲を放きたる月のしずかさよ

三月や稜線著し北五葉

サイレンに涙の浮ぶ震災忌

いつの間に眠りおりたり春炬燵

曲りくる水のうねりの雪解沢

残月の赤々沈む斑雪山